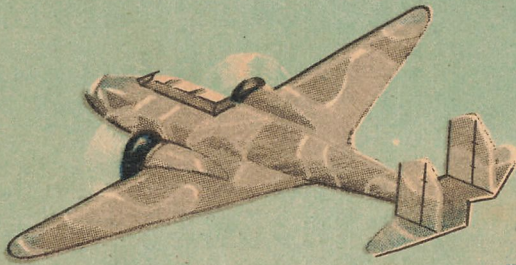


祝第三十六回海軍記念日

大月興行 人秋攝摺編



秀夫

有

文楽彦 区橋畔

乍 憚 口 上

風薫る初夏のみぎり御最負いづれも様には益々御清榮に遊ばされ大慶に存じ上げ奉候然る處當座に於ては非常時下愈々郷土藝術本來の使命を果すべく選定狂言の内容又は座員一同の精進努力によつて充分に職域奉公の一念達成致度存じ茲に引續き青葉の頃の五月興行と仕り文樂獨得の秘藏狂言を網羅して銃後健全娛樂の最高峰を目ざして突進いたし殊には此度第三十六回海軍記念日の意義ある月に當りて之れ又及ばずながら當座獨得の藝術を以て新作仕り候海國日本の歴史を偲ぶ一幕を差加え御高覽御批判を賜はる事と相成り申候次第に御座候就ては當興行を機會として御引立を蒙り居候豊竹駒若太夫儀此度四世豊竹司太夫の名跡を相續仕候間之れ又相變らず御引立を賜り併せて當興行開演勿々より陸續御來場被下成度偏に御願申上候

昭和十六年五月一日

四ツ橋 畔

文 樂 座 敬 白

昭和十六年五月一日初日

初日午後二時開演

毎日午後三時開演

・御 觀 覽 料 ・

一等席 御一名 金三圓五十錢

(二階座席三十錢上り)

二等席 御一名 金一圓五十錢

三等席 御一名 金六 十 錢

(各等入場税別)

一等御座席
一等椅子席) は五日前より

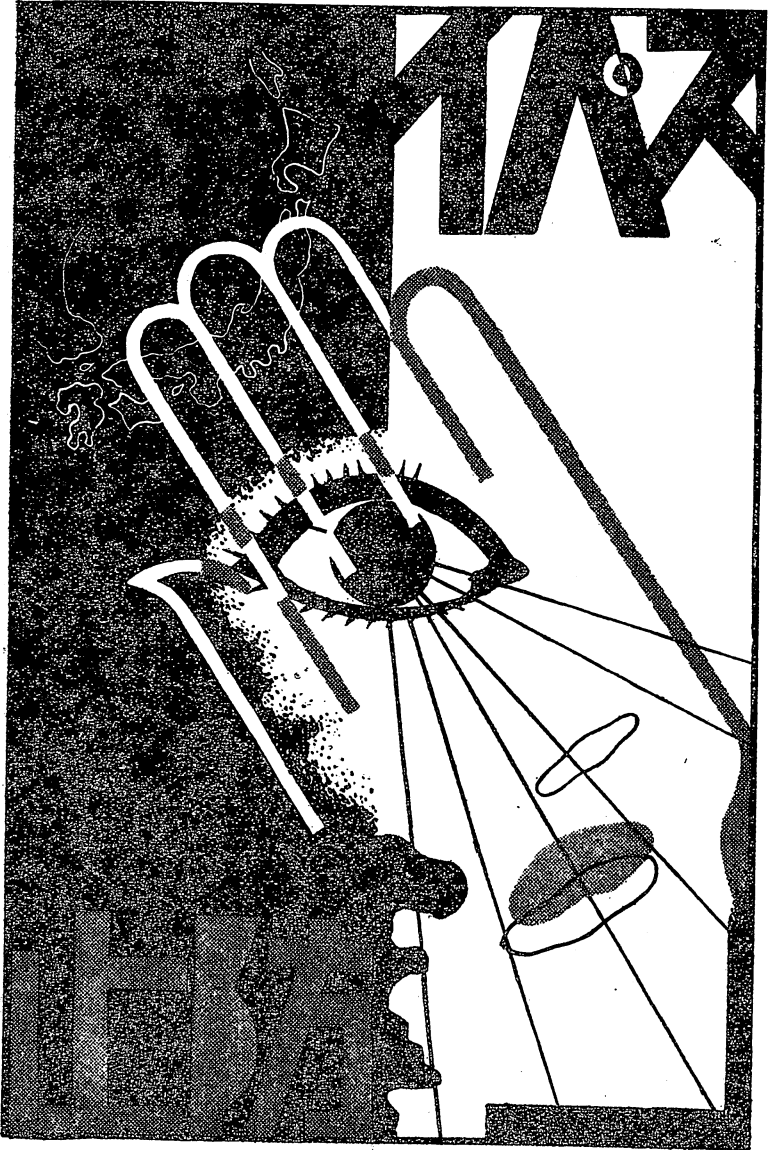
前賣切符發賣致居候

前賣切符 南①四七壹番番
專用電話 南②三〇三二番

一般御用 南③三七八八番
の電話

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ります。

展發外海ノ先祖ナル忘・日念記軍海回六十三第祝



國民精神總動員

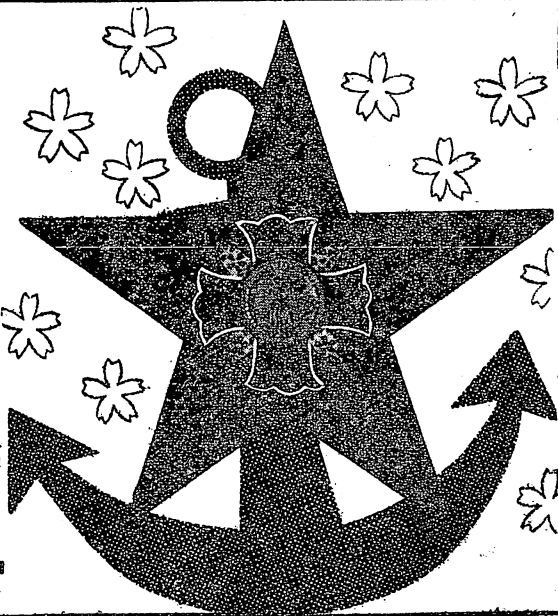


憲法報國

舉國一致

堅忍持久

國を護つた傷兵護れ



傷兵保護院
國民精神總動員中央聯盟

人形浄瑠璃五月興行

五月一日 初日

初日 午後二時開演
 毎日 午後三時開演

太夫・三味線・人形總出演

第一 鬼一法眼三略卷
きいち ほうげんさんりやくのみき

第二 金比羅花上野譽碑
かねひら はなのうへ のほまれのいしぶみ

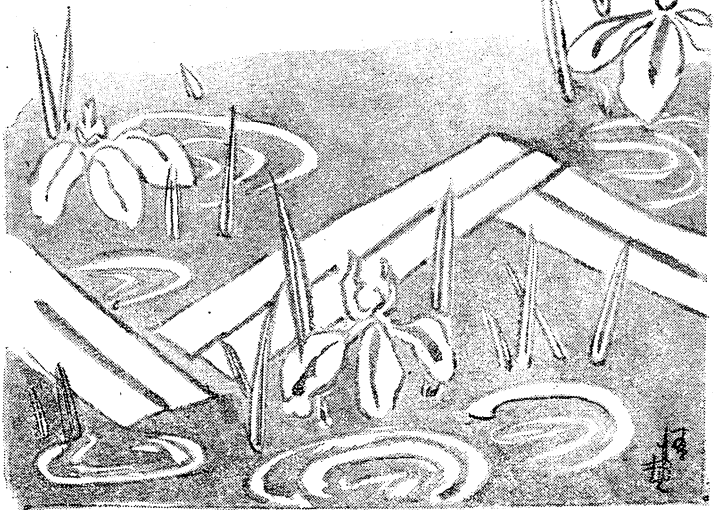
第三 海國
かいこく
 十日 二本魂
じふにほんたましひ

第四 繪本太功記
えほん たいこうき

第五 關取千兩幟
せきとり せんりやうのぼり

第六 神靈矢口渡
かみれい やぐちのわたし

渡し守頼兵衛内の段



鬼き一いち法ほふ眼げん三さん略りやく巻のまき

五條橋の段



五條橋の段

鶴	野	竹	竹	竹	竹	竹	牛	ツ
澤	澤	本	本	本	本	本	若	
友	友	文	織	越	隅	津	丸	
平	造	太	子	名	若	磨		
	彌	夫	太	太	太	太		
		夫	夫	夫	夫	夫		

享保十六年九月十三日(二三九一)より竹本座に上演
 作者は文耕堂、長谷川千四。全曲は五段よりなり、殊に
 第三段目「菊畑」が有名である。尙、この五條橋の段は
 その第五段目に當るもので、牛若丸と辨慶とが主従の契
 を結ぶ件りを特に抜き出して所作事風な一幕としたもの
 である。

(床本) 五條橋の段

扱も源の牛若丸。父の修羅の魂魄を慰めんと川風添ゆ
 る夜あらしの夕程なき秋の空。面白や心うき立御扮装。
 肌には練の御あはせ紅ひすそごの御きせなが糸かず織の
 大口に薄縁といふ御佩刀。五條の橋をさしてくる傘のし
 ぶきも高足駄橋板とどろと踏ならし行こふ人を待たまふ
 御有さまぞ不敵なる。西塔の武藏坊辨慶は其頃都にあり
 けるが五條の橋には人をなやます曲者有りと聞しかばそ
 れを従へ召遣はんと心も空もはるゝ夜の月も音羽の山の

辨 牛

若 人

形

慶 丸

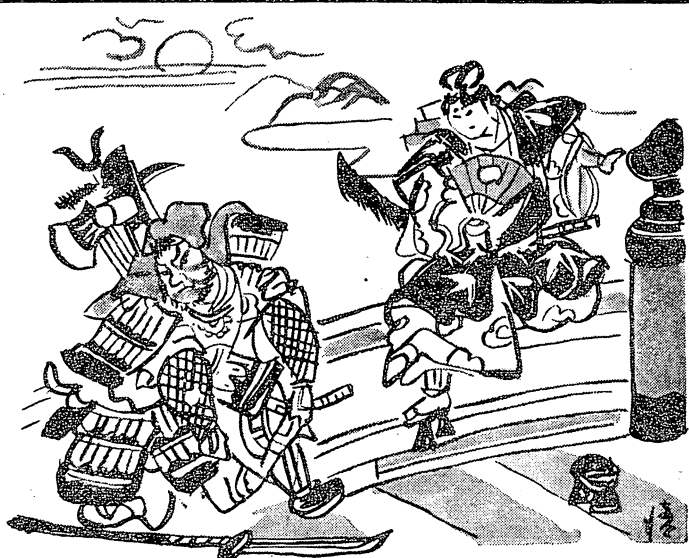
役

吉 吉 割
田 田
玉 榮 三
市 郎

ツ 慶
レ

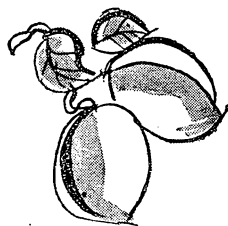
鶴	鶴	豊	野	竹	豊	竹	野	豊	竹	鶴	鶴	豊	鶴	豊
澤	澤	澤	澤	本	竹	本	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤
徳	友	友	團	勝	南	松	吉	仙	團	清	友	新	鶴	叶
三	三	太	伊	年	次	島	左	松	作	友	花	郎	郎	二
若	郎	郎	三	年	夫	夫	左	松	作	友	花	郎	郎	郎

端に出立つ鍔は黒革緘し。好む所の道具にはくま手ない鎌鍔の棒。さい槌鋸鍔さす股さすまゝに権現より賜はつたる大薙刀真中取て打かづきゆらりくゝと出たる有様いかなる天魔鬼神なりともおもてをむくべきやうあらじと我身ながらも物たのもしく手に立者のア、ほしやとひとり言して打わたり向ふをきつと見てあれば橋のほとりの青柳の糸より細き腰付にてすつくと立たる女すがた傘傾けておもはゆぶり。辨慶元來法師の身女に何といひかけん詞もなまめく氣色にはぢ橋のかたへを過ゆけば若君彼をなぶつて見んと右へよくれば右に立ち左りへ行けば左りに行く。ちがひさまに薙刀の柄をはつしと蹴上ればスハくせ者よ物見せんと薙刀柄ながく追取のべ切てかゝれば若君の薄衣取のけ打寄する。つるぎをあざむく傘の六十間の橋の上ひらりくゝくるくゝ車にもまるゝ牛若丸辨慶いらつてさそくをふみ遁さじものと切込を丁ど請たる勢ひは雨をおこせる蛇の目の傘風ふきはらへば飛かはしひらりと抜たる小太刀のかげ星のひかりと水車所は名におふ加茂川の流に立波どうくゝ、どうと寄すれば白鷺のあしべにあさる片足立、すがたはつくばね羽子



板の拍子はきぬたの音。むそふ返しうつゝの太刀二つの
 鰐音からくくらんかん傳ふさゝがにの蜘蛛のふるま
 ひ木づたふましら水の月かや手にたまらぬすがたをした
 ふ薙刀のゑたりやおふとしつかと取りゑいやと引けばゑ
 いと引く橋の擬寶珠玉の汗鎧を削りて戦ひける辨慶秘術
 を盡せ共終に薙刀打落され組んとすれば切はらふ縫らん
 とするに便りなく詮方盡て橋桁を二三間とびしさり呆れ
 果て立たりける。此辨慶に大汗かゝす汝は何者ホ、我こ
 そは源の牛若丸シタリ道理で大體の人でないと思ふた今
 より後は御家來コレ可愛がつて下はんせと頭を橋にぞ付
 けにける主従三世の縁の綱約束長き五條のはし橋辨慶と
 末の世に語傳へて繪にも書祇園祭の山鉾にも祝飾るぞめ
 でたけれ。





献上の桃
花

志渡寺の一段

後	次	前	中	
竹澤團六	竹本織太夫	野澤吉五郎	竹本相生太夫	豊竹和泉太夫
		豊澤廣助	竹本大隅太夫	鶴澤叶

金比羅 御利生 はなのうへの 花上野 譽碑 ほまれのいし

志渡寺の一段

天明八年八月（二四四八）江戸肥前座にて「金毘羅利生記花上野譽の石碑」全七段として上演され、作者はしば芝叟、筒井半平。所謂田宮坊太郎の仇討を淨瑠璃に仕組んだものに、明和元年七月（二四二四）竹本座上演の「金毘羅御利生敵討稚物語」全九段があり、作者は近松半二、竹本三郎兵衛で、これを改作したものが「花上野譽の石碑」であつたが、最初は七段目までで、未だ敵を討つ所に到つてゐなかつたのを翌寛政元年二月（二四四九）寛候多藏、玉木筆二によつて八九十の三段が補足され目出度く敵討をとげる大團圓となつたのである。尙、全段の中この第四段目志渡寺が最も名高い。

梗概

父源八が非業の死を遂げた後、その子田宮坊太郎は叔父土屋内記に引き取られ、志渡寺の方丈に預けられ敵に油断させるため偽啞となつて仇討の

人形役割

乳母お辻	吉田榮三
森口源太左衛門	吉田玉藏
土屋内記	桐竹政龜
奥方菅の谷	吉田小兵吉
方丈	吉田玉徳
門弟團右衛門	桐竹紋司
門弟十藏	吉田文二郎
門弟數馬	吉田多三郎
雲竹坊	吉田兵次
念西坊	桐竹門次
田宮坊太郎	桐竹紋之助
腰元	吉田利男

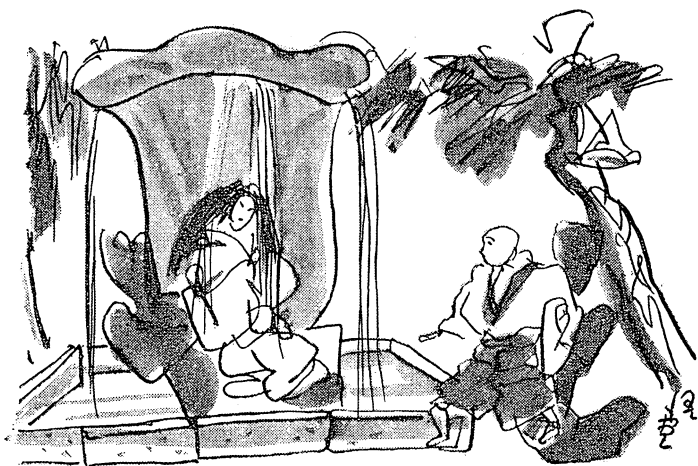
機會を待つてゐた。

坊太郎の業病を悲しんで忠義な乳母お辻は火絶ち五穀絶ちして金毘羅大権現に祈願をこめその快癒を祈つた。

或日お辻は亡主の墓參に來て、かへつて志度寺の靈場を穢したとて、悪坊主共に責め苛まれてゐた。それを内記の妻菅の谷がとりなした。坊太郎に連れられてお辻は泣く泣く立去つた。

菅の谷は二人の後姿を見送つてゐた時、腰元が注進に來た。それは今日夫内記と森口源太左衛門との御前試合の勝負の知らせである。然し、口惜しいことには内記が武運拙なく負けたのだ。相手の源太左衛門こそ、坊太郎の父の仇であつた。

折柄、内記、方丈、森口、弟子共が數多志渡寺に入り來り、酒宴を始めた。坊太郎も酌勤めに出たが、内記に酌して源太左衛門に酌をしない。森口は大いに怒り、坊太郎の首筋をとつて引据ゑた——と、坊太郎の袂から桃の實が二三個こぼれて



出た。森口は思ふ壺、抑々も當寺の桃は名物にして、殿に献上濟まぬ間は何人も指さしもならぬ桃——と、坊太郎を庭先へ蹴落した。

乳母お辻、物蔭から駆け出で、坊太郎を庇ひながら、桃を盗んだことを森口に詫びる。

森口はそれには耳もかさず一刀の下に斬り捨て様としたが、方丈は其手を取り果物と人命との輕重を論じて森口を説破した。森口は流石に斬り兼ねて悪口雑言して歸へつて行つた。

後にお辻は懇々諄々坊太郎に向つて盗み心の淺ましさを教訓した。坊太郎、啞のかなしさ物言ふことも出来ない。

然しこれとお辻に食べさしたいばかりに盗つた桃の實だつた。お辻は泣いて喜んだ。

金毘羅大權現に一命捧げて祈誓をかけたお辻は自害した。

一間の内から立出でた土屋内記と菅の谷。内記は坊太郎に口をきく事を許した。お辻は初めて仇

を欺く計略の偽啞だつたと知つて安心した。それに内記が御前試合で森口に負けたのも計略だつた。土屋はお辻が三七日の斷食艱難の効驗は現はれて、坊太郎が急に劍道の上達した事を話し、冥途への土産に見て行けと、弟子の數馬、十藏を呼んで坊太郎と試合をさす。折から金毘羅大權現はありくと松の梢に現はれ給うた――。

お辻はニツコリと笑つて死んで行つた。

(佐和利) 志渡寺の段

ヤアくくそんなら桃を盗ましやつたは、アノ此乳母にくれふと思ふてかア此乳母に。ヲ、よふ盗んで下さつたくくのふ。ヲ、可愛の子やと引寄せて抱きしめく、コレこらへて下され赦してください。そふとはしらず色々、恥しめたは。エ、何事ぞいの。元をいへば盗人の。悪智慧付けたもやつぱり此乳母。思へばくれ程に。かしこい智慧を持ち乍ら。何故果報つたないぞ。父御が此世にござるなら。馬の稽古よ學問よと。座敷の内もお手車。乳母も衣裳を着飾つて。一寸出るにも徒士

若黨美々しい行列あるべきに。小僧よくと口穢に森口づれが足に迄かゝる憂き目は何事ぞ。現在母御はあり乍ら。三つの年より生別れ。又父御にも死別れ、よく親御に縁薄き。こなたがいとしうござるはと、くどき立てくわつと計りに欺きしが。

スリヤ是迄此和子が、啞と見せしはこしらへ事か。そふとは知らず一心に、金毘羅様へ祈誓をかけ、三七日の斷食艱難辛苦も水の泡。イヤく、そなたの誠心正しく金毘羅權現納受あつたるしるし。其譯知りし吾々夫婦。坊太郎に敵を討せんと密かに屋敷に招き寄せ、教へる武藝も遣は子供忘れし事も多かりしに心得ぬは此程から、武藝の覺え智慧才覺、おとなも及ばぬ發明は不思議くと云ひくらし。日數も恰度三七日。そんなら私が此の命捨てたが功にたちましたか。ヲ、立つとも疑なき證據は、まざく蒙むる夫の靈夢。軍術の聞へある東國の青柳家へ。坊太郎を送られよと見し正夢を幸に。東の母にも廻り會ひ。コレ此筭のかたしをもつて首尾よふ敵を討つた後。必らず出家得道して、乳母が亡跡亡父の菩提を弔へと、呉々も、伯母が詞を守つたる、此稚子の敵討首尾よふ仇を討し後、其名は空仁大徳と道得末世に咲匂ふ。花の上野の片邊り、古跡を残す石碑の響は今に著し

大坂地方海軍人事件部指導
西亭作詞符塚大克三舞台裝置

海國日本魂

全二十景

白本相楽夫
 豊白白大夫
 白本織大夫
 白本南都大夫
 白本雅大夫
 白本医術大夫
 霧澤道
 野澤吉次
 霧澤重
 白澤園
 野沢晴
 霧沢潤

大坂海軍人事件部指導
 西亭作詞符塚大克三舞台裝置
 白本相楽夫
 豊白白大夫
 白本織大夫
 白本南都大夫
 白本雅大夫
 白本医術大夫
 霧澤道
 野澤吉次
 霧澤重
 白澤園
 野沢晴
 霧沢潤

「海國日本魂」上演に就いて

白井松次郎

皇國海軍の武威は今支那沿岸並びに南洋海面に赫々と耀いて居ります。而して尙日本の高度國防には何んとしても海軍の力に俟たねばならぬところが多いことゝ承知いたして居りますが、此時本年恰も第三十六回海軍記念日を迎へますことは誠に意義深く一層時局意識を痛感いたさるゝことでございます。就きましては弊社所屬各劇場に於きましても此絶好の記念日を協賛いたしまして各々その上演の特色に従ひまして海事思想を喚起いたしますると共に當文樂座に於きましても人形淨瑠璃といふ特種の藝術をもつて遠き古へよりの海國日本を繪卷物の如く寫し出し皇國海軍本然の姿を如實に現はすことに努力いたしましたが充分とまでは參り兼ねますが何卒其意のある處を御諒察くださいませして御觀覽の程を御願申上げます。

海國日本魂 劇場割

第一景	大海原
第二景	ロ
第三景	竹林虎狩
第四景	島夷
第五景	海岸
第六景	浦賀沖黒船の渡來
第七景	二志士の隠れ家
第八景	錦旗御東征
第九景	旅順口
第十景	福井丸船上
第十一景	飛行基地
第十二景	軍艦旗掲揚

(床本) 海國日本魂

第一景 大海原

開幕 暗轉

夫れ皇國の大日本國是定まり給ひしより潮満溜の二た御瓊海神の守らせて八汐路始め參らする實に海國のありがたき

此の間に暗轉より徐々に明るく海面を見せる

第二景 ローマ

其の昔夢も通わぬ外國に通へば通ふ鑽石心重き使命も三年越波路も長き長崎を幾艱難の憂月日今は十六よふ歳の春花のローマに晴着して心の意氣の日本魂今ぞ異國にかゞやけり

此の間に前景の大海原に旭を徐々に昇天、御朱印船風の渡航船下手より上手を進まし背景變りてローマの都法皇廳の寺院の塔其他當時の様式建物見せ、少年使節二人ローマ風の飾り馬にて靜かに進む、其の他使節歡迎の様式見せる

第三景 竹林虎狩

皇神の御徳頂く國性爺血に流れたる勇猛は弱き

を助く日本の是ぞ誠の武士の道

爰にて素囃子音樂にて和唐内と、大虎との大立廻り、古風時代調大芝居にて

第四景 島夷

此の音樂の中に臺灣風の島夷と、是又時代的な大立廻り、メリヤス入にて

第五景 海岸

勇名は、こゝ六昆の國主とて今を時めく長政が故國の便り吹送る椰子の葉風のサワ／＼と來し越方の古郷をしのぶ夜すがの一奏で

長政「次郎右衛門殿妻が拙なき一曲も又思ひ出の事もあらん今宵一夜の御名残りぢやのう」

次郎右衛門「長政殿残り惜ふ存じまする、いつか又逢ふ其の日迄ずい分健固を祈ります」

長政「夜もふくる明早朝の御出船御引止めもなり兼申す……オ、月が出た故國日本を出し月ぢや、思ひ出すは元和三年我等二十七歳の五月ぢや若い心の功名心は廣い世界に天地を求め大和男の意氣をしめすも男に生れた仕事の一つと御貴殿方の御

朱印船に無理矢理に乗船を乞ひ早十年の憂艱難今此のシヤム六昆の國主オークヤーサーナピモツクと位人臣を極め申したが、次郎右衛門殿弱い心で云ふでは御座らぬ幾十年、幾千里道はへだより、

年經るとも、一時忘れぬ故國日本御國を思ふ一念はいつかな忘れは致しませぬぞ、イナ誠日本人なればこそ御國を思ふ一心は誰れよりもく此長政猶一倍強ふ御座りまするぞ」

妻「ア、申貴方様モウ御時間が」

長政「イヤこれは不覺、名残りは盡きじ次郎右衛門殿」

次郎右衛門「長政殿」

妻「すい分御無事で」

次郎右衛門「お二人様にも」

長政「おことも健固で」

互ひの目元はらくく握り締めたる手の内に通ふ血汐ぞ一つなれ

第六景 浦賀沖黒船の渡來

燃ゆる心も戸ざされし、鎖國も爰に三百年今打破の一發の號砲浦賀に黒船の暗き夢路も覺されて黎明海國日本が今ぞ誠の姿なり

此の間に黒船來航の浦賀沖を見せ、音樂のみにて氣分を出す

第七景 二志士の隠れ家

中岡「阪本トウく來るべき日が來たの」

坂本「ウム長い暗夜の道じやつた」

中岡「こんどの薩長の聯合も貴公なればこそ成功したんじや、仲介の勞多とするぞ」

坂本「イヤ時勢じやよく恐れ多いが、一天至尊

の御稜威じやよ、したが中岡、西郷の無口、桂の短

氣、この對象には弱つたぞ、氣短の桂も良くマア

辛抱してくれたもんぢや、西郷も太つ腹じやの」

中岡「どれもこれも赤心は一つ皆誠のあらわれぢ

や、我等とても赤心一途じや」

中岡「(謡曲にて)君は舟く臣は水く」

坂本「(これも謡曲がかり)水良く舟を浮かべて

「イヤ其れじやが中岡、お主は陸援隊長わしは又海援隊長今後のお主は陸軍で大いに頑張れわいは又勝先生に教わつた航海學を基礎にうんと一層勉強して大いに海軍でがんばるぞ、今後の日本に海軍はなくてはならぬ降魔の劍、護身の楯じやでの」
中岡「そうじや、わしは最新式の兵法で最強の土佐藩陸隊イヤ日本陸軍の建設に努力する、君は海軍で大いに活動してくれ」

坂本「やるぞ、文久の薩、英の戦も畢竟薩摩の捨身の戦法功を奏して、イギリスが戦意を失して逃げたればこそよかつたんぢや、後で調べたら海岸の薩摩の各砲臺はほとんど皆威しじやつたと云ふではないか、沿海防備の必要じや堅固でなくちゃの實に冷汗一斗はおるか百斗物じやよ、三百年幕府の鎖國は我日本の發展をどれ程後れさせたか、木造軍艦舊式砲ではの世界の各國に伍しては行けぬよ、國土の防衛は先づ外敵を防ぐ海軍に課せられた重大の責務じや、やるぞ」

中岡「いかにも互にやるべき時が来たんじや、海陸共同日本の土は日本人で守るんじやからの普天の下卒土の濱皇土の下に國民一致じや」

坂本「其の意氣／＼中岡祝ひ酒の使ひの戻つて来るまでお主のヨサコイ久しぶりに聞かせ」

中岡「ようし……土佐は良いとこ南を受けて薩摩嵐がそよ／＼と(二人で)ヨサコイ／＼」アハ、中岡「誰れだ?アツ」

此の歌の終り刺客忍び

刺客「……………」

(ト誰だの聲の終る内に無言の一刀)

(坂本が力に手のとゞいた瞬間又一刀)

坂本「アツ、卑怯者、名乗れ」

(とばつたり倒れる、刺客姿を消す)

坂本「……………」

中岡「……………」

中岡「サ坂本ツ……貴様しつかりせい」

坂本「中岡残念乍頭をやられた、ヤアヲお主は」

中岡「ウ、ウ、いけん今今一步まで來ながらツ残念、坂本お主大事な身ぢや死ぬな」

坂本「……駄目ぢや運命じやする御奉公は互ひに終つた……中岡聞ゆるか……ソレ……アノ響

……維新の……黎明のアノ力強い歩調のひびき……中岡……大君の在す方を」

此の終り頃より三味線で維新軍樂のひびきを徐々に段々聞かす

中岡「オ、」

坂本、中岡「皇運ババ萬々歳」

軍樂次第に大きく舞臺暗轉

第八景 錦 旗 東 征

(音樂ばかり)

第九景 旅 順 口

春未だ海上冷氣身に浸みて、四面暗澹旅順口音なく進む福井丸

第十景 福 井 丸 船 上

折しも探照一閃に撃出す敵彈雨あられ

廣瀬「杉野兵曹長ツ」

杉野「ハツ爰に居ります」

廣瀬「ウム杉野か用意は」

杉野「とゝのひました」

廣瀬「御苦勞、デワ早速點火」

杉野「ハッ」

杉野船艙へ下りる時一條探照燈一閃、敵彈砲臺より砲撃集中、爆發の音、此の間音樂續く中佐大聲にて

廣瀬「杉野ツ、全員ボートに移乗したぞツ、杉野ツ……、杉野……(此の時一彈中佐に命中)アツ

杉野ツ(倒れ乍らも呼びつゞける)」

憎や一彈中佐が胸、七生報國盡忠の念、壯烈無

双鬼神も哭く

廣瀬「杉野ツ……(段々聲細りて行く)テ、天皇

陛下、ババ萬歳」(終り聲切れる)

冥せ幾多海軍の忠勇義烈の勇士の靈

暗轉になる暗夜より徐々に明け方の照明

第十一景 飛 行 基 地

敵の荒ぎもひしぎたる、片翼飛行の沈勇は神も

守らん其の神枝、戦火に燦と輝けり

「櫻村大手柄じやの、體當りの強膽、片翼の飛行の放れ業、共に日本魂の權化ぢや、世界戦史上の大記録ぢや」

稱へよ空の荒鷲を、空襲爆撃偵察に、海に平野に山岳に、譽れは高し我海鷲

海軍曲、音楽

第十二景 軍艦旗掲揚

仰げ旭の御光りを

想へ四海の我國土

東亞の圈の廣き海

我海軍の責重し

今日は南の酷熱に

明日は北邊極寒に

氷雪風雨嫌ひなき

我海軍に感謝せん

軍艦マーチ



12



尼ケ崎の段

中 竹本文字太夫
豊澤新左衛門
切 鶴澤清古靱太夫

人形役 割

武妻	眞母	武嫁	加軍	百
智	柴	智	藤	
光	さ	重	虎	
秀	つ	次	之	
操	き	菊	兵	
吉	吉	郎	姓	
吉	吉	吉	大	
田	田	田	大	
榮	文	光	ぜ	
三	五	之	い	
郎	郎	枝	い	
吉	幸	助		
作				

繪本太功記

尼ケ崎の段

寛政十一年七月十二日(二四五九)から大阪道頓堀豊竹若太夫の芝居に上演された。作者は近松柳、近松湖水軒、近松千葉軒。全曲十四段よりなり第十段目(十日目)の夕顔棚の尼ケ崎の段が有名である。題材は明智光秀謀反の顛末を仕組んだもので「繪本太閤記」に據り脚色されてゐて、太閤秀吉に關する多くの戯曲中、最も世に知られたものである。尙、全十四段の構成は、所謂光秀の蘇鐵の諫言を發端にして、天正十年六月一日の安土城饗應の日の意趣から、本能寺の變となり、同じ十三日小栗栖に百姓の竹槍に哀れな最期を遂げるまでを十四冊に脚色してゐる。

梗概

父光秀との出陣を許された重次郎は今宵決死のおもひを胸に秘め、母操に又祖母臯月に、生來十八年の恩を謝せずには居られなかつた。

それと察した許婚の初菊は可憐にも重次郎に縋つて名残を惜しむのだつたが、重次郎はけなげにも、所詮討死のおのれと別れ、他家へ縁づきする様懇々と悟すのだつた。

しかし、初菊は乙女ごゝろの一筋にどうしてこれが思ひあきらめられやう、せめて今宵は凱陣をと云ひさして後はたゞ涙涙であつた。

時刻が移ると、重次郎は初菊のかひ添へで緋おどしの鎧も凛々しく装ひ立つた。

臯月と操は、今出陣の門出と、銚子盃の用意をし、重次郎初菊に酌み交させたのだつたが、これは祝言の盃であり、又今生の名残の盃でもあつたのだ。臯月の心中にしてみれば、なまなか出陣の止めだてをして、主殺し光秀の子として生き恥をかゝさうより、むしろ健氣な討死をさせた方がと苦しい計らひだつたのである。

折柄聞える攻太鼓、重次郎は、さらば、と初菊を振り捨て、まつしぐらに戰場へと馳せ参じて行

つた。

この様子をそつと伺ひ見た最前この家に宿をとつた旅僧は、さり氣なく、風呂の案内をするのだつたが、まあお先へと云はれるまゝに、又湯殿口へ入つた。涙を押しかくした老母、操、初菊の三人も奥へしばしと立つて行つた。

あとは遠近に鳴きしきる蛙の聲ばかり、その中を拔足さし足忍びよる簑笠をつけた武士。それは、智光秀であつた。最前この家に入ると見たのは、僧形に身をやつしては居るものゝ正しく敵將眞柴久吉だつた。必定久吉この内と、門前の青竹をひつそいで竹槍を作つた。そして一と間に聞えるもの音、こゝぞと突込む槍先に、わつと叫んだのは眞柴にあらぬ老母臯月だつた。餘りのことに光秀も茫然とした。この騒ぎに操も初菊も奥からはしり出で、このあり様は何事と老母に取り縋つた。

臯月は苦しい眼を開き、叛逆人のわが子光秀をたゞ人非人と罵り、その天罰は親に報ひ、この通



り青竹のひつそぎ槍で最期をとげるのだ、と氣丈にも熱涙を揮つた。

操は又夫光秀に、門出の折の諫言をくりかへし、せめて母御の御最期に善心に立ちかへつて呉れ、と夫を思ふ誠の涙にむせたのであつた。

強情我慢の光秀は、どうしてこれを受けつけやう。惡逆無道の小田春永を亡ぼすは、民を安むる英傑の志、女童の知る事ならず、と聲あらゝげて諫言を阻んだ。

その折しも表口から刀を杖に早くも手負の重次郎はよろめき、立ち歸つて、斷末魔の苦しい息を吐くのだつた。光秀は、わざと荒々しく、戰場の仔細を尋ねると、味方は久吉の家臣加藤清正勢に追ひ立てられ負け戦、四方天但馬頭は行方知らず、と云ふのである。さう云ふ中にも早致死期の老母と重次郎、初菊も操も身もだへして悲んだ。流石の光秀も、これにはこらへかね、はらくと落涙するのであつた。

又もや聞ゆる劇しい人馬の物音に、光秀は物見へ上つて見廻すと、一面の千生飄の旗印、さては久吉攻め寄せ來ると齒嚙みをする折、眞柴筑前守久吉對面せん、と奥より聲をかけたのは、以前の僧形とは打つて變つた武裝の久吉だつた。久吉は山崎にて時を移さず雌雄を決せんと立ち去らうとするので、光秀も、首を洗つて觀念せよ、と互に敵味方睨み合ひつゝ別れたのであつた。

(床本) 尼ヶ崎の段

一間に入りにけり。残る苔の花一つ、水上かねし風情にて、思案投首しほるばかり、やうく涙押とゞめ、母様にもば、様にも、これ今生の暇乞ひ、此身の願ひ叶ふたれば、思ひ置く事更に無し、十八年が其間御恩は海山代難し、討死するは武士の習ひと思召し分られて、先立つ不幸は赦してたべ。二つには又初菊殿、未祝言の盃をせぬが、互ひの身の仕合せ、わしが事は思切り、他家へ縁付して下され、討死と聞くらばさこそ歎かん不惑やと孝と戀との思ひの海、隔つ一間に初菊が、立聞く涙轉び

出で、わつとばかり泣き出せば、はつと驚き口に手をあて。ア、コレ〜聲が高い初菊殿、扱ては様子を。アイ残らず聞て居りました。夫の討死遊ばすを、妻がしらいで何とせう、二世も三世も女夫ぢやと思ふて居るに情ない、盃せぬが仕合せとは、あんまり聞えぬ光義様、祝言さへもすまぬ内、討死とは曲がない、わしやなんぼうでも殺しはせぬ、思ひ留つて給はれと、すがり歎けば。ア、コレ〜此方も武士の娘ぢやないか重次郎が討死は豫ての覺悟、ばゞ様に泣顔見せ、もし悟られたら未來永々縁きるぞや。エ、。サア、とかふ云ふ内時刻が延る。其鎧櫃爰へ爰へ、アイ〜、サ早う、時延びるほど不覺のもと、聞譯けないと叱られて、いとしい夫が討死の、首途の物の具つけるのがどう、急がるゝ物ぞいのと泣く〜取出す緋緘の、鎧の袖にふりかゝる、雨が涙の母親は、白木の土器白髮のばゞ、長柄の銚子、蝶花形首途を祝ふ碓斗昆布、結ぶは親と子手脚當、六具かたむる三々九度此世の縁や割子札、猪首に着なす鍬形の、あたりまばゆき出立は、さわやかなりし其骨柄。オ、天晴れ武者振いさまし、功名手柄見る様な、祝言と出陣を一緒の盃、

サアサア早う、目出度い〜嫁御寮と、悦ぶ程猶いや増す名残りこんな殿御を持ちながら、これが別れの盃かと、悲しき隠す笑ひ顔、随分お手柄功名して、せめて今宵は凱陣をと、後は得云はず喰ひしぼる、胸は八千代の玉椿散りてはかなき心根を、祭しやつたる重次郎、包む涙の忍の緒。しぼり兼たるばかりなり。哀を爰に吹送る、風が持てくる攻太鼓、氣をと直しつゝ立上り。いづれもさらばと言ひ捨て、思ひ切つたる鎧の袖、行方知らず成にけり、ノウ悲しやと泣入る初菊、母も操も顔見合せ、ばゞ様、嫁女、可愛やあつたら武士を、むざ〜殺しにやりました。なう初菊、重次郎が討死の出陣とは知りながら、なま中留めて主殺しの、憂死恥をさらさうより健氣な、討死させん爲祝言によそをへ盃さしたのは、暇乞やら二つには、心残りのない様と、思ひ餘つた三々九度婆が心のせつなさを推量しやとばかりにて、初めて明かす老母の節義、きく初菊も母親も、一度にどつと伏轉び前後不覺に泣叫ぶ、襖押し明け何氣無う、つか〜出づる以前の旅僧、コレ〜かみ様、風呂の湯が沸きましたどなたぞお這りなされませと、云ふにこなたは、泣顔か

くし。オ、それは御苦勞去りながら、年寄は新湯は毒、後は若い女共、マアお先へ御出家から。いかさま、湯の辭義は水とやら、左様ならば御遠慮なく、お先へ參る、と立上れば、三人は涙押包み、奥の佛間と湯殿口、入るや月もる片びさし。爰に苅取る眞柴垣、夕顔棚のこなたより、現はれ出たる武智光秀。必定久吉此内に、忍び居るこそ屈竟、只一討と氣は張弓、心は矢竹藪垣の、見越の竹をひつそぎ槍、小田の蛙の啼音をば、とゞめて敵に悟られじと、拔足差足、窺ひより、聞ゆる物音心得たりと、突込む手練の槍先に、わつと魂ぎる女の泣聲、合點ゆかずと引出す手負、眞柴にあらで眞實の、母のさつきが七轉八倒、ヤアこは母人が、しなしたり、残念至極とばかりにて、流石の武智も仰天し、只茫然たるばかりなり。聲聞付けてかけ出る操、初菊諸共はしり出で、ノウ母様が情けない、此有様は何事と縋り歎けば目をみひらき歎くまい、歎くまい、内大臣春永と云ふ主君を害せし武智が一類、かくなりはつるは理の當然、系圖正しき我家を逆賊非道の名を穢す、不幸者とも悪人とも、たとへがたなき人非人、不義の富貴は浮べる雲、主君を討つて

功名顔、たとへ將軍になつたとて、野末の小屋の非人にも、おとりしとはしらざるか、主に肯かず親に仕へ、仁義忠孝の道さへ立たばもうそう飯の切米も、百萬石に増るぞや、おのれが心只一つで、しるしは目前これを見よ武士の命を斷つ刃も多にこのやうな、ひつそぎ竹の猪突槍、主を殺した天罰の、報ひは親にも此通りと、槍の穂先に手をかけて、ゑぐり苦しむ氣丈の手負、妻は涙にむせ返り、これ見給へ光秀殿、軍の首途にくれぐも、お諫め申した其時に、思ひ留つて給はらば、かうした歎きはあるまいに、知らぬ事とは云ひながら、現在母御を手にかけて、殺すと云ふはエ、マ、何事ぞいの、せめて母御の御最後に善心に立かへると、たつた一言聞かしてたべ、拜むわいのと手を合はし、諫めつ泣いつ一筋に、夫を思ふ恨み泣き、操の鏡雲りなき涙に誠あらはせり。光秀聲あらゝげ、ヤア猪小才な諫言立、無益の舌の根動すな、意恨を重ねる小田春永、勿論三代相恩の主君でなく、我諫を用ゐずして、神社佛閣を破却し、惡逆日々増長すれば、武門の習ひ天下の爲、討取たるは我器量、女童の知る事ならず、すさり居らうと光秀が、一心變ぜ

ぬ勇氣の顔色、取つく島もなかりけり。折しも聞ゆる陣太鼓、耳をつらぬく金鼓の響き、あはやと見るや表口、數ヶ所の手疵に血は瀧津瀨、刀を杖によるぼひく、立歸つたる武智が一子、庭さきに大息つき親人これにおはするや、云ふも苦しき斷末魔、見るに驚く母親より、娘は傍に走り寄り、のういたわしや重次郎様、祖母様と云ひお前迄此有様は情けない、お心たしかに持つてたべ、やいのくくと取付て、介抱如才泣くばかり。光秀わざと聲あらまげ。ヤア不覺なり重次郎、仔細は何と、様子はいかに、具に語れと呼はれば、はつと心を取直し。親人の差圖にまかせ、手勢すぐつて三千餘騎、濱手のかたに陣所をかため、今や歸國と相待つ所に、敵はそれとも白浪の、櫓を押切つて陸地に漕付けおいく都へ馳せ登る眞柴が軍勢ござんなれと、鬨をつくつて味方の軍兵、縦横無盡に薙立つれば、不意を打たれて敵は敗亡、狼狽騒ぐを追詰め爰をせんど、戦ふ中後の方より大音聲、眞柴筑前守久吉の家臣加藤清正これにあり、逆賊武智が小童共目に物見せてくれんと、いふより早く太刀抜かざし四角八面に切立てられ、またく間に味方の軍卒、殘ら

ず討死仕り、無念乍も只一騎立歸つて候と、息つきあへず物語れば、光秀怒りの髪逆立て、ヤア云ひ甲斐なき味方の奴原、シテ四方天田島守は、さん候四方天は目ざすは久吉一人と、昨朝よりの一騎がけ亂軍なれば生死の程も、慥にそれと承らず、親人の御身の上、心にかゝり候故、未練にも敵を切りぬけ、これまで落延び歸りしぞや此所に御座あつては危ふしく、一時も早く本國へ引取り給へ、サ早くくと、深手を屈せず父親を、氣つかう孫の孝行心、聞くに老母はせき兼て、アレあれを聞きや嫁女、其身の手疵は苦にもせず、極悪人の悴めを、大事に思ふ孫が孝心、やい光秀子是不惑にはないか、可愛いととは思はぬかやい、おのれが心只一つで、いとし可愛の初孫を、忠と義心に健氣なる、討死でもさす事か、逆賊無道の名を汚し、殺すはなんの因果ぞと。せぐり苦しき老の身の、聲聞きつけて重次郎。ヤアそんなら祖母様には、御生害遊ばしたか、今生のお暇乞今一度お顔が見たけれど、モウ目が見えぬ、父上母上様、初菊殿、名殘惜やと手を取つて、妹脊の別れ愛着の、道にひかるゝいぢらしさ、母は涙に勿體なく、討死するも武士の習ひとい

へど情けない。十八年の春秋を刃の中に人となり、いつ
樂しみの隙も無う、弓矢の道に日をゆだね、今日の首途
の其時にも、母様今日の初陣に、天晴れ功名手柄して。
父上やばく様に、譽らるゝのが樂しみと、につと笑ふた
其顔が、わしや幻にちらつて、得忘れぬとどき立て
くどき立つれば初菊もほんに思へば此身ほど、はかない
者が世にあらうか、解けて逢ふ夜のきぬくも、永き名
殘の許嫁、二世を結ぶの枕さへかはす間もなう此様な、
悲しい別れをする事は、マどうした罪か情けない、私も
一緒に殺してたべ、死にたいわいのと身をもだへ、互ひ
に手に手を取かはし、名殘涙のいとま乞ひ、見るに目も
くれ情消え、母も老母も聲をあげ、わつとばかりに取亂
せば、流石勇氣の光秀も、親の慈悲心子故の闇、輪廻の
絆にしめつけられ、こたへかねてはらくはら雨か涙の
汐境浪立ちさわぐ如くなり。又も聞ゆる人馬の物音、矢
叫びの聲かまびすく、手にとる如く聞ゆれば、光秀聞よ
りつゝ立ち上り。アノ物音は敵か味方か、勝利いかにと
庭さきの、抛木の松ヶ枝踏しめくよぢ登り、眼下の村
手をきつと見くだし。和田の岬の弓手より、追々つゞく

數多の兵船、間近く立つたる魚鱗の備へ、千生瓢の馬印
は、疑ひもなき眞柴久吉、風を喰つて此家を逃げのび、
手勢引具し光秀を、討取るてだてと覺えたり。と云ふよ
り早くひらりと飛下り、草履掴みの猿面冠者、イデオト
ひしぎと身繕ひ勢ひ込んでかけ出せば。ヤア武智光秀暫
く待て、眞柴筑前守久吉、對面せんと呼はつて、三衣に
かはる陣羽織、小手脛當も優美の骨柄、悠然として立出
れば、光秀見るより仰天し、駈戻つてはつたと睨み。ヤ
珍らし、眞柴久吉、武智十兵衛光秀が此世の引導渡して
くれん、觀念せよと詰寄る光秀、中を隔つる老鳥の子故
に手疵屈せぬ老女、ノウ久吉様我が子に代るこの母も、
天命のがれぬ引そぎ槍、つくきり罪の萬分一、亡る事も
あらうかと、思ひ餘つた此最後、武智が母は逆磔付に、
懸つて無慘の死を遂げしと、末世の記録に残してたべ、
それも矢張忤めが、可愛さ故の罪亡し。うるさの娑婆に
殘らんより、孫と一緒に死出三途、ハア私もお供いたし
まする。いづれもさらば、おさらばと、未練残さぬ武士
の花も實もある此世の別れ、今ぞはかなくなりけり。
操の前も初菊も更に詞も出でばこそ、あへ亡骸を推動か

し、天に懂がれ地に伏して、歎く心ぞいぢらしき、哀を
餘所に眞柴久吉、光秀に打ち向ひ、俱に天を戴かぬ亡君
の弔ひ戦、今此所で討取つては、義あつて勇を失ふ道理
諸國の武士に久吉が軍功を知らさん爲、時日に移さず山
崎にて、勝負の雌雄を決すべし、がいかにかゝ、オ、流
石の久吉よく云つたり、我も惟任將軍と勅許を受けし身
の本懐、一トまづ都に立歸り、京洛中の者共へ地子を許
すも母への追善、互ひの運は天王山、洞が峠に陣所を構
へ、只一戦にかけ崩さん、首を洗つて觀念せよ、ホ、
ホ、ホ、何さ、たとへ項羽が勇ありとも、我又孫
吳が秘術をふるひ、千變萬化にかけなやまし、勝鬨上る
は瞬く中と、久吉が詞はゆるがぬ大磐石、忽ち廻り小栗
栖の、土に哀を残すとは、知らず知られぬ敵味方、睨み
別る二人の勇者二世をかための別れの涙、かゝれとしてし
もうば玉の、其黒髪をあへなくも、切拂ふたる尼ヶ崎、
菩提の種と夕顔の、軒にきらめく千生瓢箪、駒のいな、
き迎ひの軍卒、見渡す沖は中國より、追々入來る數萬の
兵船、威風凛々凛然たる、眞柴が武名假名書に、寫す繪
本の太功記と、末の世までも残しける。



猪名川内の段



弓 甜	呼 遣	大 阪	鐵 ケ 嶽	猪 名 川	お と わ
野 野 豊	竹 豊	屋 豊	竹 竹	豊	豊
澤 澤 澤	本 竹	竹 竹	本 本	竹 竹	竹 呂
龍 吉 仙	播 千	伊 勢	織 太	司 太	夫 太
三 郎 糸	路 駒	太 夫	太 夫	太 夫	太 夫

關 取 千 兩 幟

猪名川内の段

明和四年八月(二四二七)大阪竹本座初演。作者は近松半二、三好松洛、竹田文吉、竹田小出、八民平七、竹本三郎兵衛。全曲は九段よりなり、その中第二段猪名川内から相撲場の段が有名である。出處は當時大阪で人氣力士として最眞の血を湧せた稻川と千田川とに絡ませて「雙蝶々曲輪日記」(寛延二年(二四〇九)七月竹本座上場。作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳)の力士達引を繙案して趣向を凝らしたものの。尙、原作では力士の猪名川は岩川とあるが、文政九年二月(二四七九)座摩境内の興行の時から、猪名川と改められて今日に及んでゐる。

梗 概

猪名川が堀江の假住居には最眞客からの祝儀の贈物が賑々しう飾つてある。往來の人々は其の威勢よいのを見乍ら猪名川の全盛を譽めたゝへて通

人形役割

女房おとわ 桐竹紋十郎

猪名川 桐竹政龜

鐵ヶ嶽 桐竹門造

大阪屋 桐竹紋司

呼遣い 吉田兵次

る。内で之を聞く猪名川の女房おとわの顔は輝いてゐる。

敵方の力士鐵ヶ嶽を伴つて猪名川が歸へつて來たのでおとわは之を迎へて愛想よく會釋する。折節、大阪屋から使ひが來て「錦木身負けの殘金を今日中に拂つて欲しい。明日になつたら據所無く他の身請客に渡さねばなりません」と云つて歸つた。

猪名川は「これは大變、錦木を他に身請けさせて俺の顔が立つものか」と駈出す。

鐵ヶ嶽は聲を掛け「これ猪名川、ちよつと待て其の身請け客は外でもない俺だ」といふ。

猪名川は、さては彼奴め九平太の手先となつて錦木を身請けしようとしてゐるのかと知り「鐵ヶ嶽よ一生の頼みだ。俺が受合つた身請けの殘金二百兩の調達に窮してゐる苦衷を察して、九平太が錦木を請け出す事を思ひ止まらせることはなるまいか」と懇請する。



然し、胸に一物ある鐵ヶ嶽は猪名川の言葉尻を捉へ「汝が惠海庵で九平太を打擲した仕返しだ」として暴行を加へる。

折から取組の番附が届いたので手に取つて見れば、猪名川と鐵ヶ嶽との組合はせになつてゐる。鐵ヶ嶽は猪名川がこの相撲に負けてくれるなら、錦木を禮三郎に渡す様に斡旋しようといふ意を仄めかす。猪名川は無念の涙を吞んで、若旦那の爲めに鐵ヶ嶽に勝を譲らうと決心して別れる。

金故大事な相撲を振つてやる心の中の切なさ、摩利支天にも見放されたかと男泣きに泣く猪名川——然し義理には勝てず覺悟を決めた。

女房おとわは之を立聞きして夫の心を察し、胸に咳上げる悲しみの色を見せじと殊更に笑顔を作り、優しく話しかけて夫の髪を撫附ける。鏡に映る夫の顔は常になく青ざめてゐた。

猪名川は相撲場へ進まぬ足を早めた。後に妻は獨り無量の感慨と思案に暮れ、何を思

ひ立つたか直ちに夫の後を慕うて家を出る——。これも密に身を苦界に沈めて二百兩を調達しようと思つて決めてゐたのである。

(佐和利) 猪名川内の段

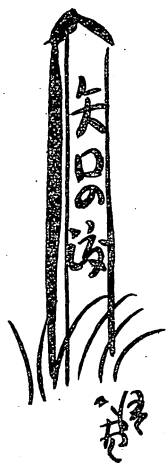
芝居は南、米市は北、相撲と能の常舞臺、堀江くんと國々へ、鳴り響きたる猪名川が、角力の内は夫婦連、爰に堀江の假住居、店は初日の飾り物、半紙、毛氈、煙草盆、羽織、脇差、取禪、酒は松葉へ米俵、餘所の軒端をかり初の賑々しくぞ見えにける。

ドレ往て來うと立ち上れば、コレ待たしやんせ、ソレ髪が強う亂れて有るぞへ、人中へ見苦しい結ふて上げふと取出す櫛箱、イヤく結ふて居たら隙が要る、つひ撫付けて置いてたも。オ、お前もこんな髪して、行かしゃんした事が無いが、いつその事、何も彼も云ふて聞かして下さんせぬか。ヤ云へとは何を、サイナ、お前の心のナ、それ縛れ髪、撫で付けて置かうより、いつそさつぱり云はんしやんせぬかと云ふ事いな。イヤ云ふまいく

なんぼ私に云へと云やつても、高が女子の手業、云ふたら大方後れが出やう、つい撫で付けて置いてたもと、傍に直れば女房も、押しては云はぬ縛れ髪、鬚のほつれを撫で付ける、櫛の背より夫の胸、寫して見たき鏡立。

ア、急な事できへ無くば、工面の仕様も有らうに、僅二百兩の金故に、大事の角力を振つて遣らざ成るまいと思へば、腑甲斐ないやら口惜いやらで、俺や胸が裂ける様なわい、オ、道理でござんす、もつともでござんすわいな。角力取を男に持てば、江戸長崎や國々へ行かしゃんすりや、其跡の、留守はなほ更女氣の、獨りくよく物案じ。夫に怪我の無いやうにと、祈る神様、佛様妙見様へ精進も、戻らしやんして顔見るまで、案じて夜を寝ぬ女房の、今この切なる苦しみを、連添ふ私に言はしやんせぬ、お前はそれほどつれないと、女夫に成つた今までを、數へ立て、怨み涙に時移り。

渡し守頓兵衛内の段



神しん
靈れい
矢や
口ぐち
渡わたし

渡し守頓兵衛内の段

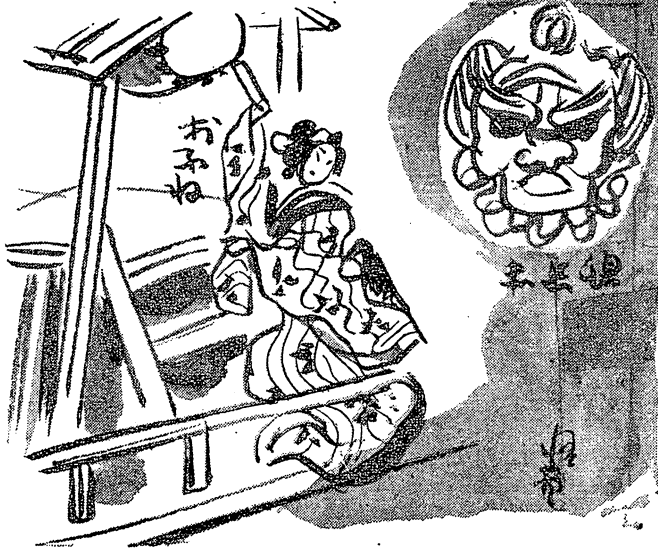
	後	前
割	竹鶴	竹鶴
	本澤	本澤
	重南	重南
	友部	友部
	衛太	衛太
	造夫	造夫

娘	渡し	船頭	新田	傾城
お	六	義	峰	臺
兵	藏	公		
舟	衛			
桐	吉	吉	吉	吉
竹	田	田	田	田
紋	玉	玉	文	光
十	藏	幸	作	之
郎			助	助

明和七年正月十六日(二四三〇)から江戸の外記座に上演、作者は福内鬼外(平賀源内)に吉田冠子、玉泉堂吉田二一などが補助として名を列ねてゐる。全曲は五段よりなり、頓兵衛内の段はその第四段目に當つてゐる。その題材は、新田義興が竹澤良衛、江戸高重等に謀られて武藏の矢口渡に於て横死をとげ、その怨念が雷電となつて江戸高重を悶死せしめ、のち同所に新田明神として祀られると云ふ事は、太平記第三十三卷の「新田左兵衛佐義興自害の事」に詳はしいが、これが矢口明神縁起の原據となり、これに依り技巧を凝らして脚色したのが本曲で、淨瑠璃作者福内鬼外としての平賀源内の代表作とも云ふべく、と共に大阪中心の義太夫淨瑠璃に對し、江戸作者の淨瑠璃中の名作でもある。

梗概

都より東へ通ふ道筋の矢口に渡守をする頓兵衛



は、棧作に物好した亭座敷を控へた家作、渡世にも似ぬと思はれるも尤も、此の頓兵衛性來の強慾非道で、足利方の竹澤監物、江田判官の手足となつて、舟底に穴をあけて、敵將新田義興を六郷の川に沈め、その褒美の金を元に今はこの近郷近在切つての金持長者である。ところが頓兵衛の娘お舟は、親には似ず氣立もよく、田舎には惜しい纏緞である。引手も多い中に、この家の下人六藏ぞつこん惚れ込んで、人使の荒い頓兵衛の内に働いて居る。

今日も、はや暮れかゝる黄昏時、簀と笠とに人目を忍んで立ちかゝつた男女の二人、男は義興の弟、新田義峰、女は深くも言交した傾城うてな、生麥村を落ち延びて、弔合戦の用意にと故郷新田をさして行く途である。元義興の御最期ありし矢口の渡と思へば、此の水底が恨めしい。南無尊靈出離生死頓生菩提と川に向つて回向して、渡しを頼まうと門口に立つた。お舟は義峰の氣高い姿に

心を動かされた。渡舟は出ぬと辭つたが、お宿ならばと、二人を一室へ案内する。その後見送つてお舟はとつおいつおほこ娘の一筋に思ひみだれた。義峰は一室を出て、うてなの爲に白湯の無心をする。お舟は連のうてなが妹と聞いて、思ひつめて言寄ると、義峰も、それほど思うてくれる志さらしく仇には思はぬと、お舟の手を取ると不思議や忽ち身の内ふるへて其場に倒れる。うてなは走り出て、さては娘の色香に迷ひ御旗の科を受けられたかと、御旗を義峰の懷から取り出すと、二人は息を吹き返す。

義峰はあたりを見廻し、此家の様子と云ひ、場所と云ひ、心得ずと娘の戀慕を幸に問ひ落そうと近よつて今の始末、仔細があらうと、うてなを促がして奥へ入る。表へ立戻つて様子を伺がつて居た六藏、一腰ぼつこみ、あの旗を所持するからは新田の落人、召捕つて褒美にすると、奥へ踏ん込まうとする。立ち塞がつてお舟は、戀の邪魔を拂

はうと、これまで言寄つたは皆偽か、返事もしなかつたが、其方の心を見た上でと思つて居たゆゑ夫婦になればと、様の爲には子ぢやないか。親子の間に抜がけしては悪からう。と、様は庄屋どのへ行つて居る程に、とくと相談したがよいと、六藏はのせられて、喜こんで駆け出して行く。お舟は門口の掛がねかけてとつかはと一室へ入つた。

遠寺の鐘がかうかうと鳴る。門口の一むら茂る藪の中からぬつと出たは主の頓兵衛。納戸の壁を切り破つて、闇に紛れて忍び入り、足音忍び、漸やうに義峰の寢處と思ふ床下から、闇にもひかるだんびら抜いて突込んで、障子蹴はなし、月かげに見れば娘のお舟、お舟は父を怨めし氣に見て、人は死なうが倒れうが、我さへよければ構はぬと強慾非道の天罰がわが子に報いたと意見して、義峰様は月の出ぬ間を幸に落してやつたと打ち明ける。頓兵衛は齒がみをなして、手負の娘を打擲する。娘は此世で添はれぬ悪縁と聞けば聞く程義峰

様の戀しく、父の手にかゝつて死んだら、親と一つでないと言ふ言譯立つて、お言葉通り未來でいとしい方に會はれうか、又一つには一人娘が先立たば一念發起してお心もなほらうかと覺悟をきめて死んで行く、娘可愛と思ふなら、心を離へして義峰様を助けて頼んだが、父はいつかな聞き入れず、義峰様を取逃しては顔が立たぬと駈け下りて、かねて合圖の狼火をあげ、何處までもと落人の後追うて行く。娘は苦しい身をあせり、きつと亭にかけた太鼓に目をつけ、これを打てば、落人の圍を解く筈と、よろほひながら駈け上がる。それ打たせてはと六藏が駈け寄つて抱きとめやうとする。お舟は必死に六藏の脇ざし抜いて切りかゝる。六藏は危ふしと川へ飛び込む。女の念力、撥も折れよと太鼓を打つた。四邊には圍を解く貝の音が聞える。頓兵衛は小舟を漕いで落人逃さじと追つて行く――。

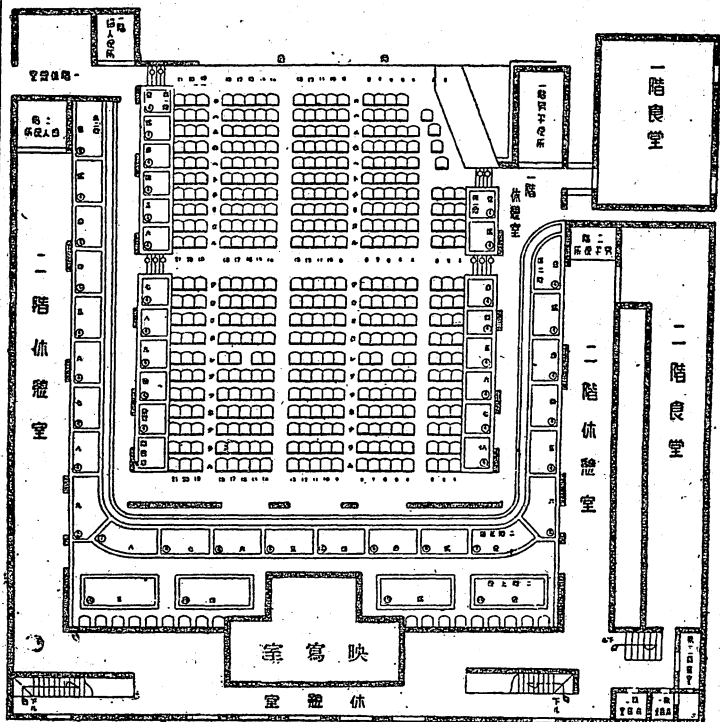
(佐和利) 頓兵衛内の段

娘は顔をつれづれと、恨めしさうに打眺め、申しとつ

様、浮世に生れた人毎に、慾をしたらぬはなけれ共、お前の様に凝りかたまり、佛とも法とも辨へず、人は死なうが倒れうが、我さへよければ構はぬと、身勝手許りの強慾非道、あらう事か源氏の大將、義興様をたばかつて、むざむざと殺したる其天罰が我子に報ひ、宵に泊りし旅のお方、義峰様とは露しらず、可愛らしい殿ぶりに恥かしながら心の迷ひ、お傍へ寄れば恐ろしや、御旗の咎め義興様のお怒りにて悶絶せしもさうとはしらぬ戀路の闇

娘は袖にしがみ付き、異見云ふても歎いても、聞き入れ給はぬ無得心、かゝ様がござるなら、仕様もやうもあらうもの、何を云ふても身一つに思ひつめたる義峰様、此世で添はれぬ悪縁と、聞けば聞くほど猶戀しく、お手にかゝつて死んだなら、親と一つでないと言ふ、言譯立てば未來にて、いとし殿御に逢はれうかと、それを頼み二つには、一人の娘が先立てば一念發起もしたまひて、お心も直らうかと、はかない事を頼みにて、覺悟極めて死にまする。娘可愛と思ふならお心を離し、義峰様も助けてたべ、頼みまするとくどき立て、ワツト許りに伏沈む。血汐に争ふ血の涙不惑と云ふもおろかなり。

文樂座御場席案内



御觀覽席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前賣切符・壹等席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命のお節お呼出しの電話は

南四七壹壹番で御座ります

切符賣場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します

五月の芝居御案内

川漢戸神 場劇竹松 <small>四〇四四川漢話電</small>	條四都京 座南 <small>五五一—國都話電</small>	堀 頓 道 座 角 <small>二一二二南話電</small>	堀 頓 道 座 中 <small>九七二一南話電</small>	阪 大 座伎舞歌 <small>六二八二戎話電</small>
日初日一 開二午正晝 演回時五夜	日初日一 開二午正晝 演部時五夜	日初日一 開二午正晝 演回時五夜	日初日一 演開時四夕毎	日初日二 開二午正晝 演部半時四夜
松竹家座劇	大歌舞伎	新舊合同劇	創立十周年記念 前進座公演 日曜マチネ！ (正午開催)	東西大歌舞伎
第 第 第 第 第 五 四 三 二 一 老 實 青 轉 赤 春 業 運 動 帽 兵 意 泉 戰	國 茶 一 訛 道 條 嫩 太 大 笈 閤 藏 摺 記 脚 (晝の部) 菅 原 傳 授 手 習 鑑 藤 茶 山 日 坐 漁 莊 屋 播 漁 庄 娘 女 磨 莊 (夜の部)	第 第 第 三 二 一 堀 杉 妻 部 野 兵 曹 長 の 妻 安 兵 衛 (つま)	第 第 第 三 二 一 一 本 刀 土 俵 入 元 祿 忠 臣 藏 三 笠	女 連 近 江 源 氏 先 陣 子 館 山 獅 文 庫 賊 (晝の部) 妹 背 山 婦 女 庭 訓 増 補 忠 臣 藏 潜 水 艇 第 六 號 三 春 色 社 庵 祭 祭 塚 號 藏 (夜の部)
一 二 三 四 等 等 等 等 席 席 席 席 二 一 八 五 圓 圓 十 十 (税別) 圓 錢 錢 錢	一 二 三 四 五 等 等 等 等 等 席 席 席 席 席 二 一 一 八 五 圓 圓 十 十 十 錢 錢 錢 錢 錢 (税別)	特 一 二 三 四 等 等 等 等 等 席 席 席 席 席 二 一 一 七 五 圓 圓 十 十 圓 圓 十 十 錢 錢 圓 錢 錢 (税別)	特 一 二 三 四 五 等 等 等 等 等 席 席 席 席 席 四 三 二 一 一 五 圓 圓 圓 圓 圓 圓 圓 圓 圓 圓 錢 錢 圓 圓 圓 錢 (税別)	一 二 三 菊 櫻 等 等 等 席 席 席 席 席 席 席 四 一 一 八 六 圓 圓 圓 圓 圓 圓 圓 圓 圓 圓 錢 錢 圓 圓 圓 錢 (税別)

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場でゐります。

文樂座人形淨瑠璃は 曾に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我

日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ますやう、皆様の御期待に

背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居ります。尚御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に

設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますからお服物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます

お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事 は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座居ります。

賣店 は 二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

場内にて寫眞撮影は絶對にお断り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

お出口は 下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを付けて居りますから御用の節は御申附け

下さい、其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程も願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勸

めますから豫め御諒承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として 案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上ける事に致しました。御一報次第登壇、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑦三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十六年 四月 卅 日 印刷

大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹株式會社大阪支店

江 鏡 也

大阪市西區土佐通一丁目十二番地
印刷所 永井日英堂印刷所

一 部 金 二 十 錢

文樂座南一食堂

賜命下御に前幕一は用御の事食御
すまい座御で利便御極至は北は

(でま時八らか時五)間時事食御

橋ツ四阪大

南温泉料理

御宴會にも
御家族連にも

電話南⑦⑤

一	一	一	一	七
三	三	三	三	〇
三	三	三	三	一
四	三	二	一	番
番	番	番	番	番

